

# メディア・ディスコースの分析方法に関する予備的研究

－Norman Faircloughのクリティカル・ディスコース分析を中心に－

小柳 和喜雄

(奈良教育大学 教育実践総合センター)

## A Preliminary Research on Method of Media Discourse Analysis －A Focus on Critical Discourse Analysis by Norman Fairclough－

Wakio OYANAGI

(Center for Educational Research and Development, Nara University of Education)

**Abstract** : We live in the world surrounded by media. Media give us various information everyday. We accept the information without questioning, "where the information come from". However, the information from media is always selected, edited, and distributed. Norman Fairclough constructs a theory in which the connections between "the orders of discourse", such as the motivated and conventionalized selection from linguistic options, and "the orders of society" are shown to be co-determined. This paper focuses on the student's words expressed on media and attempts to identify a way to interpret the influence of media on student, referring to Fairclough's theory.

キーワード：メディア Media、ディスコース Discourse、批判的言語意識 Critical Language Awareness

### 1. はじめに

日常生活において、子どもたちは、たくさんのメディアに囲まれている。そしてそこで様々な文化圏を作り出している(図1参照)<sup>1)</sup>。そこから流れてくる情報を子どもたちがどのように選び取り、受けとめ、表現しているのか?このような子ども達の活動に対してどのような調査や教育的働きかけが行われているのか?

メディアと教育とのかかわりで見ると、これまで、メディア教育、メディア・リテラシー教育などで、「子どもとマスメディア」「若者とマスメディア」の関係考察が行われてきた<sup>2)</sup>。そして、子どもによりメディア環境、メディアコンテンツをどのように準備できるかが問われてきた(子どもによりテレビ番組作り、インターネットのWWW上の情報作り)<sup>3)</sup>

また、情報教育で、メディアとうまく付き合っていく方法を子どもにいかにつかうかが検討されてきた(例えば、インターネット上の情報をいかに読み取るか?自分達の調べたことを、メディアを使ってどのように表現していくか、など)<sup>4)</sup>。

しかしながら、「子どもとパーソナルメディア」、

「メディアを通じて産出されている子ども・若者文化」と関わって、子ども・若者とメディアの間に何が起きているか、その事実を見つめる研究は、日本ではまだ少ない<sup>5)</sup>。すなわち、マスメディアから流される情報を批判的に読み解く、また学校の学習において、どのように情報を収集し、編集し、表現・コミュニケーションをしていくかについては、研究が積み重ねられてきている。しかし、子ども・若者文化がメディアと

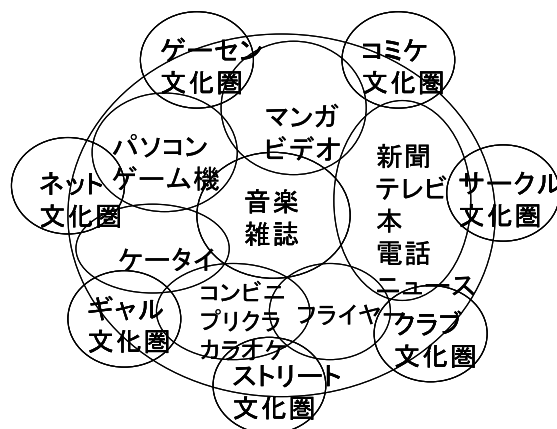


図1 サブカルチャーマップ

関わる事実関係を各トピックに関わって記述した研究（過去の様子・現状分析）はまだ少ない状況にある。また、子ども・若者達が日常メディアと接しているときに何が彼らの言葉で語られ選び取られているか、作られているか、その相互交渉の過程を探る研究は日本ではさらに少ない<sup>9)</sup>。

この理由は、その研究対象がかなりミクロなレベルであり、結果が一般化しにくいこと、また内容についてもプライベートな内容と関わるため分析対象の提供者と交渉が難しいといった点があげられる。しかしさらに根本的な理由としては、子どもとメディアの事実関係を捉えていく分析方法・解釈方法について十分な検討がなされていない状況があるからである。

まとめるならば、日本において「メディアを学習内容とした教育活動やメディアを使って教育活動を行おうとする」方法論の探求は行われているが、そもそも、「その教育活動それ自体は子ども・若者にとってどのような意味を持っているのか、その事実を問う」研究は少ない。学校教育を離れたレベルでの、すなわち日常生活での子ども・若者によるメディアとの相互交渉の過程、その事実を探求することに関心を向けた研究が少ない。そのため、学校教育の場での教育活動は成立しても、日常生活での子どもたちのメディアに対する意識、知識、行為・行動へ、変化・変容を与えていく教育活動とはなりにくい。そこで、本研究では、日常生活における子ども・若者がいかにメディアと相互交渉しているかその過程を見つめることへ関心を向けた。そして、その事実を探る研究を進めていくために、諸外国の先行研究をレビューする中で、分析方法の手がかりや知見を得、それを洗練させていくことに焦点化した。

## 2. 研究目的と方法

本研究は、以上のような問題関心から、研究目的として、「子どもたちの周りにあるメディア・ディスコース、子どもたちの扱うメディアの中でのディスコースを分析する方法を検討する」ことに定めた。メディア・ディスコース分析を取り扱う理由は、「日常生活における子ども・若者とメディアの相互交渉過程」を見ていく場合、彼らのその時々を考え、そしてそれに影響を及ぼしている慣習、コミュニティの約束事などが見えやすい分析フィールドが必要である。そのために、メディア・ディスコース分析が、本研究の目的達成に向けて最も適したフィールドであると判断したからである。

次に、研究対象としては、Fairclough のCritical Discourse Analysisに着目した。Faircloughは、メディア・ディスコース分析の中でも、「テキスト」、「テキスト生成過程」、「社会的実践」の関係に着目し、従

来のテキスト分析だけでなく、その解釈過程と生成過程のダイナミックな関係に着目し、しかもその両過程に影響している社会文化（「ディスコースの商品性・市場性」「ディスコースの対話性」）に目を向けている点の特徴である。子ども・若者とメディアの関係考察をしていく際に、そこで交わされているディスコースを手がかりに、彼らの文化を読み解き、そこに影響しているものを検討していく上で、参考になるアプローチであるためである。

また、筆者は、これまで「批判的教育学と批判的思考」<sup>7)</sup>「クリティカル・アクションリサーチ」<sup>8)</sup>など、クリティカルをキーワードとした考え方に着目し、研究を続けてきた。本研究においてもDiscourse Analysis一般を取り扱うよりも、Critical Discourse Analysisに焦点化して、これまでの概念検討の結果と比較しながら、分析方法におけるCritical概念の意味を明らかにすると共に、その上で、Criticalに反映された具体的なDiscourse Analysisの方法を明らかにすることを目指したかったからである。

このため具体的な研究の手続きとしては、最初に、研究のフィールドと定めた「メディア・ディスコース分析とは何か」を明確にし、続いてFairclough のCritical Discourse Analysisについてその特徴（関連研究におけるFaircloughの位置、Faircloughの具体的な分析モデル）を明らかにし、最後に、事例分析を通して、教育活動へ応用していく際の具体的な方法について提案を試みる。

## 3. メディア・ディスコース分析

### 3. 1. メディア・ディスコース分析とは何か

メディア・ディスコースの分析は、メディアの中で表現されている言説や語り、また広くはメディアについての言説や語りを研究対象とし、メディアの中のコード、その持つ意味、その影響など、とりわけメディアと言語と社会との関係を問う<sup>9)</sup>。

子どもとメディアというよりは大人とメディアの関係に着目していることが多く、しかも1) 新聞、2) ラジオ、3) テレビ、4) 広告など、マスメディアを研究の対象としていることが多い<sup>10)</sup>。最近ではマスメディアの性格とパーソナルメディアの性格を合わせもインターネットといった環境でのディスコース分析も現れてきている<sup>11)</sup>。

この研究に関わる研究者としては、言語学、社会学、メディア・スタディーズ、コミュニケーション・スタディーズ、カルチャラル・スタディーズを専門とする人が多く、その背景に共通して社会言語学的な問いへ関心を示す研究者が多い。また、彼らがよく引用する人物としても、Adorno, T. & Horkheimer, M., Bernstein, B., Bourdieu, P., Foucault, M., Hall, S., など、社

会学・言語学・歴史学と関わる人物が多く、その影響の範囲をReferencesより読み取ることができる<sup>12)</sup>。

"Approaches to Media Discourse"の編者であるBell and Garretによれば、「なぜメディア・テキストではなく、メディア・ディスコースなのか」と関わって、次のように述べている。

「現代のメディアの言葉は、各々話され書かれた言葉としてのディスコースやテキストといった、その間にある伝統的な言語論的差異から説明することを現実的に不可能にしている。話し言葉は、伝統的に言えば、話し手のディスコースに影響を与える、同時にそこに存在する聴き手を含んでいた。しかしメディアの中の話し言葉は、それを可能としない。...また両者の境界をぼかすもう1つの理由として、テキストの意味は、書く時ではなく、読むときに生成されると解釈されるようになってきた。...意味は今や、読み手とテキストのネゴシエーションからより生成されると見なされるようになってきた。テキストは、相互作用的なディスコースの質により影響を受けるととらえられるようになってきた。このような展開はもはやディスコースとテキストを厳密に区分することを難しくしている。...しかしながら、ここ最近の動きとして、新しい区別も生じてきた。テキストはあるコミュニケーションの出来事を、文章を単位として外に向けて明確にするために用いられる傾向がある。一方、ディスコースは、単に言語や文章と関わるだけでなく、コミュニケーションの文脈を読み取るものであるとする区分である。すなわち誰が誰となぜコミュニケーションしているのか？どんな種類の社会や状況で、どんなメディアを通じてか？どのような異なるタイプのコミュニケーションが生じているのか、そのお互いの関係はどのようになっているのか、を問うのである。メディアの文脈の中で、ディスコース分析がこれを達成していくためには、メディア・テキストの定義が、印刷された言葉という伝統的な見方を離れ、スピーチ、音楽、サウンド効果、イメージなどを含む幅広い定義を必要とするにいたってきた<sup>13)</sup>。

そしてBell and Garretは、「なぜメディア・スタディーズと直接関わらない人々が、メディア・ディスコースに関心を向けているのか」に関わって、さらに次のように続けて説明している。

「メディアは、メディア・スタディーズの中で仕事をしている人々と同様に、かなり以前から言語やコミュニケーションに関心をもち人々の間で、注目されてきた。この主な理由は4つある。1つは、メディアが調査や教育活動ですぐに接触できる豊かなデータ源であるからである、2つ目は、メディア利用が、話し言葉のコミュニティで、言葉それ自体の利用や態度に影響を及ぼしたり表現されたりするからである。3つ目は、メディア利用が、言葉やコミュニケーションを通じて投

げかけられている社会的意味やステレオタイプをかなり代弁しているからである。4つ目は、メディアが文化・政治・社会生活の情報や表現に反映され・影響を及ぼしあっているからである<sup>14)</sup>

このように、私達の所属する身近な話し言葉による共同体の中で何が生じているのか、また文化・社会・政治など幅広い分野に関わる事柄がどのように影響を及ぼして合っているのか、その問いを探求する上で、メディア・ディスコースは、豊かな情報源として存在しているため、そこへ関心が向けられているのである。

### 3. 2. アプローチの多様性

しかしながら、当然予想できることであるが、先に述べたメディア・ディスコースの分析は、決して1つの方法で行われているのではなく、多様なアプローチが存在し、実際に研究が行われている。

例えば、Media Discourseの著者であるFaircloughは、「自分の分析枠を形成していく途上で、言語学的分析・社会言語学的分析、会話分析、記号論的分析、批判的言語学そして社会記号論、社会認知的分析、文化生成的分析法などに影響を受けた<sup>15)</sup>と述べている。

実際に、先に引用したBell and Garretが編集した"Approaches to Media Discourse"へ執筆している人々がどのようなアプローチを取っているのかを見ると、それが多様であることが読み取れる。

Nottingham大学のGreatbatchは会話分析を、Amsterdam大学のvan Dijkは、社会認知という見方からの批判的ディスコース分析を、本論で注目しているLancaster大学のFaircloughは、ディスコース実践に焦点化した批判的ディスコース分析を行っている。Glamorgan大学のAllanは、カルチャラル・スタディーズを中心とした記号論的分析、そして編者であるWales Cardiff大学のBellは、構造的なディスコース分析を用いている。同じくWales Cardiff大学のGarrettは、コミュニケーション・スタディーズを背景に言語意識に関心を示し、言語学的分析をメディア・ディスコース分析に応用している。そしてLiverpool大学のRichardsonは、受け手分析（読者論）からメディア・ディスコースの分析を進め、London大学のKressとMacquarie大学のLeeuwenは、ヴィジュアル・デザインの文法をベースに分析を進めている。最後に、Westminster大学のScannellは、イデオロギーとプラグマティックといった大きな2つの視点から語られることの多いメディア・ディスコース分析それ自体に用いられている言語を分析対象とし、解釈学的なアプローチからメタレベルの分析を行っている。

このように、メディア・ディスコースの分析は、多様なアプローチが用いられているのである。

上記の研究者に共通していることは、メディア・テキストのフォーム（形式）に注意深く言及しているだ

けでなく、一定の距離を保ちながらも社会や政治の分析（ファンクション：機能を見る）にも鋭く関心を向けている点である。また分析対象として取り扱うメディア・ジャンルが、fictionalなものよりもニュースを中心とするfactualなものに多く向けられているのが共通している。

現在までのところ、メディア・ディスコースの分析は、factualなものに多く関心が向けられているが、fictionalなものもないわけではない。例えば、Cookは、広告のディスコースに関心を向けている<sup>16)</sup>、Tablotは、ティーン・エイジの雑誌に関心を向けている<sup>17)</sup>。しかしながら現在のところ、その数はそれほど多くはない。

上記のように多様なアプローチをもつメディア・ディスコース分析ではあるが、筆者なりに、" Approaches to Media Discourse"の各論者のアプローチや論の展開、結果の導き方、強調点の差異から、読み取れる範囲でその研究関心を見ると、大きくは次の3つに分かれると考えている。

1) メディア・ディスコースにおけるレトリックの分析に関心を向ける立場（ディスコースのレトリックとその配置、コード、ジャンルの分析などから、社会や政治の分析に鋭く関心を向ける）、

2) メディア・ディスコースの社会歴史的コンテキストを重視し、それを読み取ろうとする立場（あるメディア・ディスコースを産出している社会的・歴史的・時空的コンテキストを明らかにし、語られるときと語られないときが生じるのはなぜか、何が影響を及ぼしているのか、その関係やメカニズムはどのようになっているのかなどを問う）

3) メディア・ディスコースの中での機能関連や実際にそれが影響している事柄や事実関係を分析することを目指す立場（そのディスコースが、別のメディアのディスコース、あるいはメディア・ディスコースとは異なるディスコースの間で有しているある種の関係の分析を行う）。

表1 メディア・ディスコース分析の研究関心図

研究関心	レトリック	社会歴史的コンテキスト	機能・影響関係
アプローチ			
言語学的分析			
記号論的分析			
会話分析			
批判的ディスコース分析			
構造的ディスコース分析			
ヴィジュアル・デザイン文法分析			
メタ分析			

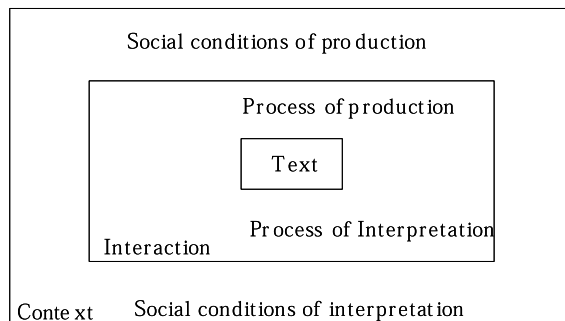


図2 コミュニケーションと関わる出来事の分析の場合

これは多少、大枠のくくり方である。しかしメディア・ディスコースに関心をもつ研究者の研究方法は多様であるが、先にもFaircloughの言葉の引用で触れたように、各自のアプローチそれ自体も複合的な性格を持っている。そのため、「メディア・ディスコース分析とは何か」を理解していく時に、分析方法の違いのみを手がかりに考えていくことはかなり難しい。そのためアプローチの違いと研究関心の違いからマトリックスを描き、メディア・ディスコースの研究地図を把握する最初の作業として分類を試みた。

結果、「Approaches to Media Discourse」から導かれるメディア・ディスコース分析の研究は、現在表1に見られるような研究関心にあると予想できる。

#### 4. Norman Faircloughの研究の位置とCDA

##### 4.1. メディア・ディスコース分析におけるFaircloughの研究の位置とその特徴

今回取り上げるNorman Faircloughは、上記の分類で言えば、「社会歴史的コンテキストの読み取り」と「機能・影響関係」の両者に交差する研究関心を示し、そのアプローチは、「ディスコース実践」に焦点化したCritical Discourse Analysis (CDA) を採用している人物である（表1☆）。

彼は、図2に示したように、メディア・ディスコース分析を行う際、「コミュニケーションと関わる出来事」に焦点化し、それを「テキスト」、「テキスト生成過程」、「社会的実践」という3層構造から分析する手法を用いている<sup>18)</sup>。社会言語学者であるFaircloughは、言語学者であるHallidayの機能的な言語分析のフレームワークの影響を受けているため、テキスト分析、コンテキストの分析において、言語学の知見を用いてミクロレベル（語彙や構文の分析など）分析やマクロなレベル（あるテキストのインターパーソナルな要素を読み取るテキスト構造レベルの分析など）を進めている。一方で、「監獄の誕生」「知の考古学」で著名なFoucaultの影響も受け、社会における言葉、ディスコース、権力の関係に関心を向け、ディスコースと社会実践との関係考察に目を向けている（表2参照）<sup>19)</sup>。

表2 社会実践とディスコース関係

社会の秩序	ディスコースの秩序
実践の型	ディスコースの型
今ある実践	ディスコースの実践

またカルチャラル・スタディズのHall、「文化資本」などで著名なBourdieuの影響も受けているため、社会実践の分析において社会文化を読み取る、すなわちそこでの価値や多様性を読み取ろうとする。その上で、「あるテキストはどのように構成され解釈されるのか、それはどのように共有されていくのか」といったディスコース実践の分析に関心を向けている。

そのため、図2に示したような、3層構造の分析枠組みから、メディア・ディスコースの分析を進めようとしているのである。

ここから、彼は、普遍的な法則の抽出へ焦点化するよりも、むしろ個々の相互作用や社会的実践へ関心を向けていることが読み取れる。

次に、Faircloughは、Gramsciのヘゲモニー論の影響も受けているため、社会的実践が作られていくプロセスの分析に関心を示し、「葛藤」をキーに分析を進めている。その際、各層の内的葛藤（“Text”，“Interaction”，“Context”の各層内での葛藤）そして外的葛藤（各層間の葛藤）を見ようと試みている<sup>20)</sup>。そして、それを、書かれた言葉やその構造だけでなく、視覚イメージや音声（会話）などからも読み取ろうとしていることも、彼の分析の特徴としてあげられる。

さらに、読み取りの視点として、彼は、ディスコースのタイプを通じて状況を読み取ることを重視している。その際、ただ静的にテキストを読み取るだけではなく、テキストの間にある生成的な過程を、つまり動的な関係を読み取ろうとするモデルを提示している（図3参照）<sup>21)</sup>

例えば「そこで何が起きているのか」を読み取るために「内容」というディスコースのタイプに着目する。次に「誰がそこに参与しているのか」を読み取るために「主体」に着目する。そして「そこにどんな関

係が存在しているのか」を読み取るために、「関係」というディスコースのタイプを読み取る。最後に「そこで言語等はどうような役割を果たしているか」を「つながり」というディスコースのタイプから読み取る。

これを先の3層を通じて行い、現代のメディア・ディスコースに強く影響している2つの傾向、すなわち「情報の提供と楽しみの提供の区別がつかなくなってきている傾向」と「公的なものと私的なものの区別がつかなくなってきている傾向」に切り込む、またテクノロジー化されたディスコース、商品化されたディスコース、会話の中に浸透していくディスコースなど、ディスコースの特性の変化に切り込むといったように、メディア・ディスコースを社会実践とつなげて考察していく手法をとっている。

したがって、このような分析枠組みから出発するFaircloughのメディア・ディスコース分析は、必然的に次のような特徴をもつといえる<sup>22)</sup>。

- 1) 社会や文化の変化は、メディア・ディスコースの中でどのように明白に語られているかを問う。
- 2) メディア・テキストの分析は、言葉やその構造だけでなく、視覚イメージや音声の効果も取り扱う。
- 3) テキスト分析は、テキスト生成とテキスト消費の実践分析を通じて行う。
- 4) テキスト分析と実践分析を、権力やイデオロギーとの関係も含む、制度及び幅広い社会・文化的なメディア実践の文脈へと位置付ける。
- 5) テキストの分析は、「言語学的分析」とジャンルやディスコースと関わる「間テキスト分析」を含む。
- 6) テキストの言語学的分析は、音声、語彙、文法、マクロ構造・図式といった多くのレベルで行われる。
- 7) テキストと社会・文化を、再生産という視点だけではなく変容という視点からも分析する。

#### 4. 2. CDAにおけるFaircloughの研究の位置

上記のような彼の分析枠を特徴付けている基本的な発想はどこから来ているのか？それはすでに先に指摘しているように、Critical Discourse Analysis (CDA) から来ている。

CDAは、英国や豪州の批判的言語学のパイオニアによる仕事の中で成長して来た<sup>23)</sup>。CDAは、1980年代や1990年代にメディア・ディスコースの調査に関する研究の中で育てられ、メディア・テキストをヨーロッパの言語学そしてディスコース・スタディーズの中で研究するといった標準的なフレームワークの中で発展してきた。CDAは、社会政治的な課題意識を明確にもち、ある社会で話されている方法の根底にある権力の不平等関係に注目し、その事実関係の解明を根拠強く行う。また社会政策上、支配的になっているものを再生産したり、逆にそれへ挑戦していくディスコースの役割を明らかにしようと試みている。

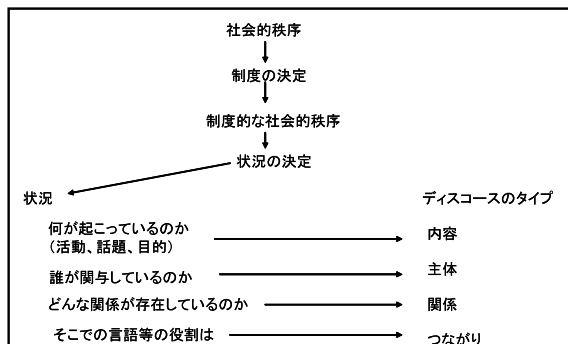


図3 状況を読み取るモデル

このようにCDAは、理論的に洗練されたフレームワークを諸問題に応用していく基盤を作り、その研究を社会的に実際に応用し、変革を考える人々の自然な道具となってきた。しかしながら、CDAそれ自体も、思想・関心・研究アプローチの仕方は多様であり、決して1つの学派に傾斜するものではない。

例えば、Toolan, Michael J. が編集した"Critical Discourse Analysis : Critical Concepts"<sup>24)</sup>の中では、Narrative and legal texts, Genres and registers of discourse, Representational resources and the production of subjectivity, Genre and field in critical discourse analysis, The problem of speech genre, On polyphony and heterogeneityといった言語学的関心からCritical (分析的意味)にディスコース分析を進める立場から、Ideology of language and gender, Racism, Feminism, Value-orientation patterns, Post-feminist, Interdiscursivity and identity, grammatical metaphor or language and the myth of power, といった社会言語学的関心からCritical (批判的意味)に社会実践へ埋め込まれた考え方や権力関係の分析などを進める立場、また、Ideology of liberalism, The moral order, Importing critical literacy pedagogy, The representation of social actorsといったempowermentや実際の社会的行為へ切り込んでいくCritical (社会変革的な意味)に関心をもって分析を進める立場など、その多様性を示している。

本論で注目しているFaircloughは、4分冊あわせて約1500ページに及ぶ"上記のCritical Discourse Analysis : Critical Concepts"に収録された68本の論文のうち、10本の論文を執筆し、CDAをリードする人物の一人である。彼のCDAの特徴としては社会的実践のディスコースに着目し(批判的意味のCDA)、それとともにCritical Discourse Awarenessの重要性を指摘する<sup>25)</sup>など社会変革的な意味のCDAとしての関心も示している点である。また、テキストと社会・文化を、再生産という視点からのみ批判するのではなく(単にある一定の視点や立場からイデオロギー批判をするのでなく)、分析においてある程度の距離を保ちながら、「主体-客体」「主体-主体」の相互変容という視点からも分析し、ダイナミックな生成過程の中で実践が作り出され、そして、そこに市民教育の可能性も秘められていることを見出そうとしている(3層構造による分析及びCritical Discourse Awarenessへの着目から)。したがって、彼のCDAにおけるCritical概念に込める意味は、「社会実践を批判的に読み解き、変革の可能性を機能的な関係考察から探ろうとする」点に特徴がある。

## 5. Norman Faircloughの分析方法の応用可能性

これまで、本論では、「メディア・ディスコースとは何か」「メディア・ディスコース分析におけるFaircloughの位置および分析方法の特徴」を検討してきた。ここでは、最後に、本論の問題関心に即して、「日常生活での子ども・若者によるメディアとの相互交渉の過程、その事実を探求する」。そして、そのために、FaircloughのCDAがどのような可能性を持ちうるのかを予備的に考察したい。これによって本論の研究目的である「子どもたちの周りにおけるメディア・ディスコース、子どもたちの扱うメディアの中でのディスコースを分析する方法を検討する」につながるからである。

FaircloughのCDAは、子どもと関わるメディア・ディスコースの様々な分析に可能性を持つと思われる。例えば、子ども番組の分析、子ども雑誌の分析(子どもたちの周りにおけるメディア・ディスコース分析)等があげられる。しかしながら今回はとりわけ、昨今話題にもなった、インターネット上での子ども達の会話(電子掲示板での会話)を分析対象(子どもたちの扱うメディアの中でのディスコースを分析対象)として、FaircloughのCDAのもち得る可能性を探求する。

以下の引用は、子どもたちにオープンにされているso-netのキッズ・子ども向けサイト「Partyルームおしゃべりコーナ」の会話である。これを対象にCDAを行い、「子どもの今」「子ども文化」「ネット上での子ども同士による相互交渉過程」「社会実践との関わり」がどのように読み取れるか、またそこからどのような教育上に有効な知見が見出されるのかという分析をする。そして結果としてCDAはどのような可能性を持ちうるか、また今後どのような工夫が求められるか(洗練化)について検討を行う。

① 由香・13歳 2004-11-30

テーマ：テレビ・映画

●○せあえ○●

呼び捨てにしてみました★

あッ、敬語じゃなくていいですよ!!タメ口でよろしく。

ハリポタですか!!うちもハリポタですね★(聞いてないって)

せあは私書ってますか??

②比奈子・12歳 2004-11-30

テーマ：テレビ・映画

★由香へ★

ハリポタのサイトはよく探す。

ゲームとかいろんな情報知りたいしい～

由香はハリポタ関係の本とか読む?

私は 大スキなんだあ～ 本♪

だから、ハリポタ関係の本もかなり読む♪

PS、由香は私書やってるう??

もしやってたら「比奈子」までプロフ送ってください♪もつとハリポタのこと話したいからさあ～

③ちっぶ・12歳 2004-12-01

テーマ：テレビ・映画

☆★比奈子s & 由香へ★☆

いきなりごめんなさい……。私わ、ハリポタめっちゃ好きの6年生のちっぶです。ハリポタ好きって言ってるのを見て、お友達になりたい!と思いました。私も、ハリポタ全巻のほかにも、ハリポタ関連の本を7冊持ってます。もちろん呼びタメオツケイなんで、ぜひお友達になって下さい(\*^▽^\*)ノ

由香とわ、しばらく前から私書で話してます。ハリポタ仲間の先輩っていうか。それで、邪魔じゃなければ、仲間に入れて下さいっ!私書専門になってたんですが、2人で話すだけじゃなく、また3、4人で話してみたいなって思っ。お2人!どうでしょうか?

④ o (\*^▽^\*) oあはっ♪・12歳 2004-12-02

テーマ：テレビ・映画

～とろっちサンえ～

自分はア陣内ってヤツ(言い方ヒデ～だに。パバマベも好きやね～。

⑤とろっち・9歳 2004-12-02

テーマ：テレビ・映画

陣内サン結構おもしろいよねー

⑥ミント・11歳 2004-12-09

テーマ：テレビ・映画

とろっちさん陣内さんって陣内智則さんですよ。私すごく好きなんですよ!

⑦ミント・11歳 2004-12-09

テーマ：テレビ・映画

好きなテレビはお笑い番組のエンタの神様です

夜の10時からやってます。興味のある人はぜひ見て下さい。

⑧とろっち・9歳 2004-12-09

テーマ：テレビ・映画

ミントさんへ

そうなの?私と同じだねー。

⑨ミント・11歳 2004-12-10

テーマ：テレビ・映画

とろっちさんへ

他にはどんなお笑い芸人が好きですか?

私はアンジャッシュさんが好きです。

⑩マッキー・10歳 2004-12-12

テーマ：テレビ・映画

「プレステ2はディイブイディイが見れるでしょ だけど次はプレステ3が出て炊飯機能がつくラヒューヨーー【笑】」「ギューンギューンソイヤツソイヤツ【笑】」ワンナイとココリコ【水10】 見てる人いたらマッキーに声かけてねo (\*^▽^\*) o

⑪o (\*^▽^\*) oあはっ♪・12歳 2004-12-13

テーマ：テレビ・映画

+++マッキーs え +++

見たいけど私の場合は、「早くねろ!!」

とか言われて、見れな～い!!(泣

でも、運がいい時は見れたりする!!

てか ワンナイと水10おもしろいよね!

⑫マッキー・10歳 2004-12-14

テーマ：テレビ・映画

うん 水10はちょーたのしいよo (\*^▽^\*) o

今週は見れる(?\_?) 見れたら明々後日話そうねd (￣ー￣)!!

⑬ピー☆・11歳 2004-12-14

テーマ：テレビ・映画

みなさんこんにちわ!

久しぶりにくち込みコーナーにきました!

ところでみなさん、好きな、映画はなんですか? 私は、ハリポタにはまっています!

皆さんはなんですか?

返事を待ってイマス!

12月、24日までにきめておいてください!では

⑭もっちゃん・10歳 2004-12-14

テーマ：テレビ・映画

みなさんへえ～☆

金ばち先生みてるひとはなぞ～!!

ちなみに・・・しゅうかわいそう・・・。

ぎゃくたいだよお～!!警察にいったらいいのに・・・。昔がよかったかもねえ～・・・。

⑮o (\*^▽^\*) oあはっ♪・12歳 2004-12-14

テーマ：テレビ・映画

見る!今週の見る～!!(見たいだけ

がんばって見るぞ(`0´)ノ オウ!!

親にバレナイように、こっそり見よう・・・☆

これは、11月30日から2週間、テレビや映画に関わって子どもたちの間で語られた(子どもたちが話題としてテレビ・映画を選んでくちこみ情報として書いた)会話記録である。

これより、FaircloughのCDAに即して分析を試行してみる。まずディスコースのタイプを次のように読み取っていく。(1)そこで何が起きているのか?何が語られているのか?(2)誰がそこに参加し、関与しているのか?(3)そこにどのような関係があるのか?関係が見られるのか?(4)そこでの言葉の役割はどのようになっているか?そして、その際、各タイプをそれぞれ次の3層を手がかりに読み取っていく。

A)「テキスト」(どう書かれているか、どんな言葉や文法が用いられているか、そこにどのようなルールがあるか)、B)「意味生成の過程」(参加している子どもはどのように書かれているものを解釈し、自分の

思いを表現しているのか)、C)「社会的実践」(そのような解釈を導いている社会的状況、そのような表現を導いている社会的状況は何か)。

例えば、(1)「そこで何が起きているのか?何が語られているのか?」について次のように分析できる。

- A) 利用している語彙は、口語調。文字(【笑】)記号(★♪)やアイコン(‘ 0 ’ノ)で感情表現する。語りのリズムをそのまま文字で表現し(「よねー」「だねー」、音声をよくカタカナやひらがなをミックスし文字で表現する。ここで共通認識されている言葉の短縮理由(私書、プロフ)、これらの言葉を使って自分が「好きな番組や出演者、本などについて紹介し、それに対する同意を求めている。親しい関係の場合には、使う語彙も同じ傾向がある。(①)
- B) ほとんどの場合、「○○さんへ」など、呼びかけから始まり、「タメ口」で話すことの許可を取り合っている(①③)。このように相手を意識した表現を試みている。2人が話しているときに割り込む場合は、丁寧な表現で関わろうとしている(③ちっぷの表現)。また、自分の表現を対象化した形で描いている(自分で自分の表現を評価する④)
- C) 流行っているもの(ハリポタ、ワンナイ。水10など)を切り口にして自分の話を展開している。親との関係など、自分の状況を説明する(①⑤)社会で問題視されている事柄に反映された話題(④「ぎゃくたいだよお〜!!警察にいったらいいのに」)を書き込んでいる。

また(2)「誰がそこに参加し、関与しているのか?」についても次のように分析が可能である。

- A) 近い年齢の子ども達、名前や会話表現から女の子と想像できる(②比奈子・12歳、由香へ;⑥とろっちゃん陣内さんって陣内智則さんですよ。私すごく好きなんですよ!)。しかし年齢はあまり影響していない(9歳の子が11歳や12歳の子と横並びで話している)。
- B) すべての書き込みに参加者が目を通してと思われるが(書き込みのつながり具合から)、誰に対して述べていくかが比較的明確に語られたため、参加人数が例え複数存在しても、そこに小グループが出来ていくのが見られる(③ちっぷはその後の返答をもらっていない)。
- C) 話す相手を見つけるまで、全体に働きかける(③実生活における友達を見つける行為が、ネット上では、意見募集の形になっている)。

以降、(3)「そこにどのような関係があるのか?関係が見られるのか?」(4)「そこで言葉の役割はどのようなになっているか?」と分析を続けることが可能であるが、今回は紙面の関係上、ここで留める。

以上、CDAをどのように「子どもとメディアの関係分析」に応用可能か、簡略化した分析ではあったが試行してみた。

上記の短い分析ではあるが、これらの分析結果を収集し、ある掲示板のある話題の中で、そこに参加している子ども達は、「何をどのような方法で語っているのか」「そこで生じているルールは何か」「彼らが求めているのは何か」などの考察が可能となる。

このような分析結果から考察までの手続き案は、「存在が認知されながら、そこから何をどのようにつかむか漠然としていた対象」に分析と解釈へのきっかけを与えてくれる。このことは、CDAが、「子どもとメディアの間に何が起きているか?メディアを利用している子どもの中で使われている言葉やルールを見出すことができる」へ何らかの貢献をすることが可能であることを示唆している。言い換えるなら、Fairclough CDAの枠組みをこのように応用することで、我々は学校で見えにくい子どもたちの世界を彼らの言葉から読み解き、そこで何が起きているか、何が起ころうとしているかを知ることができる。つまり子どもたちにかかわっていく上で、教育上有効な知見(今回の事例分析の場合は、インターネット上では、年齢差を問わず、口語表現や省略語を通じて横並びのコミュニケーションが図られている。はじめて話に参加するときなどは、子どもなりにかなり気を使っている。しかし色々な子どもが参加しているようで、実際に話し合っているグループは限定されている。そのため、いくら話しかけても、返信が返ってこないなど、思いや意思の疎通が十分にはかからないこともある。など。)を我々大人が獲得する可能性がここにあるのである。

## 6. おわりに

本研究は、予備的研究の段階にあり、今後、さらに分析方法を明確にし、洗練化させていく必要がある。しかしながら、本研究で見えてきたこととして、メディア・ディスコース分析が、大人や社会を対象としたfactualな事象の分析だけでなく、「子どもとメディアの関係」を読み解いていく上でも可能性を持つこと、また本論で取り上げたCDAは、その具体的な手がかりを我々に与えてくれていることが見えてきた。

また、このような「子どもとメディアの事実関係」の読み取りから出発するメディア・ディスコース分析は、「子どもによりメディア環境、メディアコンテンツをどのように準備できるか?」等に対しても、暗黙のルールを明確にしたり、改善の見通しを明らかにするなどの可能性を持っていると思われる。

「メディアとうまく付き合っていく方法を、子どもにいかにつかうか」を今後さらに検討していくには、メ



ディア制作者および利用者に、それぞれ自分のディスコースに気づかせ、相互の成長・変容を意識させていく発想が必要になってくると思われる。

註

- 1) 筒井愛知 (2002) 「子ども・若者を取り巻くメディアとサブカルチャー」日本社会教育学会編『子ども・若者と社会教育 - 自己形成の場と関係性の変容-』日本の社会教育第46集、東洋館出版。
- 2) 小柳和喜雄、山内祐平、堀田龍也、木原俊行 (2003) 「英国のメディア教育の枠組みに関する教育学的検討」日本教育方法学会『教育法方学研究』第28巻、pp.199-210
- 3) 日本子ども学会、CRN子ども学研究会、NHK研究所による「子どものための番組作り」に関わるプロジェクト、教育情報ナショナルセンター(NICER) などによる子どもが使える情報の提供、など。
- 4) 堀田龍也 (2004) 『メディアとのつきあい方学習「情報」と共に生きる子どもたちのために』Justsystem。山内祐平 (2003) 『デジタル社会のリテラシー』岩波書店。
- 5) 仲川秀樹『サブカルチャー社会学』学陽書房、2002年。中西新太郎編『子どもたちのサブカルチャー大研究』労働旬報社、1997年。日本子どもを守る会編『子ども白書2002』草土文化社、2002年。日本子ども社会学会編『いま、子ども社会に何がおこっているか』北大路書房、1999年。榊山寛『テレビゲーム文化論』講談社現代新書、2001年。
- 6) 英国ではメディア教育に関する研究の中で、その分析もわずかではあるが進められてきている。  
Buckingham,D. (ed.) (1998) . Teaching Popular Culture. Beyond Radical Pedagogy. London : UCL Press. Buckingham,D. (2000) . After the Death of Childhood. Growing Up in the Age of Electronic Media. Cambridge: polity press. Buckingham,D. ( 2003) . Media Education. Literacy, Learning and Contemporary Culture. Cambridge: polity press. Buckingham,D.& Scanlon,M. (2003) . Education, Entertainment and Learning in the Home. Buckingham :Open University Press.
- 7) 小柳和喜雄 (2003) 「批判的思考と批判的教育学の『批判』概念の検討」奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要第12号、pp.11-20.
- 8) 小柳和喜雄 (2004) 「教師の成長と教員養成におけるアクション・リサーチの潜在力に関する研究」奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要第13号、pp.83-92.
- 9) Fairclough,N. (1995) Media Discourse, London: Arnold.
- 10) Altheide,D.L. (1996) Qualitative Media Analysis. Qualitative Research Methods Series 38. A Sage University Paper.
- 11) インターネット・オークション等について分析を試みている研究も現れはじめた。
- 12) Bell,A. & Garrett,P. (eds.) , (1998) Approaches to Media Discourse, Oxford: Blackkwell.
- 13) Bell,A. & Garrett,P. p.2.
- 14) Bell,A. & Garrett,P. p.3.
- 15) Fairclough,N. (1995a) Critical Discourse Analysis: the critical study of language, London: Longman. P.20.
- 16) Cook,G. (1992) Discourse of Advertising.London: Routledge.
- 17) Talbot,M. (1992) The construction of gender in a teenage magazine. In Fairclough,N. (ed.) , Critical Language Awareness, London: Longman.
- 18) Fairclough,N. (1989) Language and Power, London: Longman.p.25. Fairclough,N. (1995) Media Discourse, London: Arnold. p.59.
- 19) Fairclough,N. (1989) Language and Power, London: Longman.p.29.
- 20) Fairclough,N. (1995a) Critical Discourse Analysis: the critical study of language, London: Longman.pp.91-111.
- 21) Fairclough,N. (1989) Language and Power, London: Longman.p.146.
- 22) Fairclough,N. (1995) Media Discourse, London: Arnold. pp.33-34.
- 23) <http://users.utu.fi/bredelli/cda.html> (1995 by Brett Dellinger)
- 24) Toolan,M.J. (edt.) (2002) Critical Discourse Analysis: CriticalConcepts. London: Routledge.
- 25) Fairclough,N. (ed.) (1992) Critical Language Awareness, London: Longman.